
Burn A Na・Blast ~ バナナ・ブラスト ~

縁異

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Burn A Na・Blast 〜バナナ・ブラスト〜

【Nコード】

N7975J

【作者名】

縁異

【あらすじ】

最強ルーキーと謳われる人物2人が、それぞれ別ルートでファンタジー世界を旅をするお話。彼らが旅の果てに見たものとは……

『Chapter 1: episode 4 (banana side)』まで加筆修正しました。

Chapter 1: episode 1 (banana side)・無留

ども、初めまして。

ベリタス
Veritasという者です。

このサイトに書き込むのは、初めてです。

なので、皆さん、

これから自分を、

バナナ・ブラストを、

…暖かく見守ってってください！

お願いします！

どこまでも続く青い空。そこに描かれたかのような白い雲。そんな空に見下されるような形で俺は存在している。

俺が今いるのは、とある村。 だった場所。 今や最早、というか完璧廃村だ。そして俺の目線の先には、この村が廃村となった原因である、ゴブリンがいる。

その数、実に100体。普通の奴らだったら、4、5人のパーティを組まなければやられてしまうだろう。だが、ゴブリン100体に対して相手は俺1人。100対1。普通の奴だったらゴブリン共にリンチされてKOだな。

そう……普通の奴なら、な。

「……言っておくが、先に手え出したのはテメエらの方だからな。俺には関係無えけど、テメエらが人様の村をブツ潰したのが悪いんだろ？」

ゴブリン共にこんなことを話しかけてみたが、当然通じるワケも無く、ゴブリン共はギャーギャー鳴いている。

「……ツッコむ相手がいないからスベっちまったじゃねえか。ま、いつか。じゃ、そろそろやるか？」

そう言う俺は、右手に5本、左手に5本の計10本の白刃煌めく、まるでブーメランのような形状をした短剣。 ククリナイフをどこからともなく出現させると、手の上のククリナイフに魔力を注ぐ。すると10本のククリナイフは宙に浮き、俺の背後でクルクルと回転しながら佇む形となった。

「こつちの準備は出来たぜ。……さあ、踊りましょうか！」

そう言う俺はゴブリンの群れの一角に突っ込んだ。ククリナイフも俺にぴったりくっつくようになってくる。

俺は右手で銃の形を作り、そして前方に向かって1回だけ撃つ（フリをする）。すると宙に浮くククリナイフの1本が指を向けた方向に直線上に飛んでいった。ククリナイフが描くは、ブーメランの軌跡。とは少し違うもの。ククリナイフはおよそ50メートル先で急角度のリターンをしたかと思うと、俺の元に返ってきた。もちろん、その白刃を回転させたままに。

今のでざつと20体くらいのゴブリンにダメージを与えられただろう。しかし奴らはこんな攻撃1回で死ぬようなタマじゃない。でも、大丈夫。今は前菜オードブルの中の1枚のキャベツでしかない。前菜オードブルを彩るのは、これからなのだ。

左手も銃の形を取る。そして俺は前方に両手の人差し指を向け、無尽蔵に撃ち放った。

「八つ裂きにしてやるぜ！！」

ちなみにこんなことをしても俺に隙が出来ることはない。一見、ククリナイフは乱射されているように見えるが、ナイフとナイフの間は何気に等間隔なのだ。これにより、10本目のナイフが撃ち出されても、すぐさま1本目のナイフが俺の元へ戻ってくるという仕組みが出来上がる。そんなこんなで40体くらい倒したとき、俺は気付いた。

「芸が無えな……」

なので俺は、ククリナイフでいろんな技をやったのけることにした。

まずククリナイフ10本全てが戻ってくるのを待つ。そしてしばらく時間を取った後、右手で1度だけ撃った。すると10本のククリナイフ全てが一斉に人差し指の向けた方向へ刃を回転させながら飛んでいった。

俗に言う『溜め撃ち』と同じ類の技だ。範囲は狭まり、隙も出るのだが、その分与える総ダメージ量が大きく上がる。しかし溜め撃ちは従来、群れを成さない大型モンスターなどに使うものだ。こんな大群に囲まれている最中に溜め撃ちなんてモンを使うのはバカかルーキーか余俺かであろう。だけど勘違いしないで欲しい。俺はルーキーではあるがバカではない。しかも俺はルーキーではあるが、本来の『溜め撃ち』の使いどころはしっかり把握している。俺が『溜め撃ち』を使った理由は簡単。コイツらのこと、ナメてるからだ。一方に集中してたら、他のゴブリン共が俺めがけてバットのような岩の塊を振り上げながら飛びかかって来やがった。俺はそれをサイドロールでかわす。

「ハハッ、お前らもそこまでバカじゃないってことか」

という訳で、今度は全体に行き渡るような攻撃を仕掛けることにした。

右手の銃の形を解き、左斜めに真っ直ぐ伸ばす。そして体に勢いをつけ、右足を軸とし、その場で右回りに1回転する。すると、10本全てのククリナイフが俺を等間隔で囲んだ。正確には、俺を中心として等間隔に配置された、と言った方が正しいか。そして俺は右手を頭上に掲げると、パチンと指を鳴らす。その音と共に、ククリナイフは俺から離れるように一直線にそれぞれの方向へ飛んでいった。

ちなみに俺はこの技を『十方射陣じゅうほうしやじん』と呼んでいる。が、名前を付けた方がいいが、口に出したことはほとんどないんだがな。十方射陣を数回繰り返し続けた結果、30体くらいのゴブリンがお亡くなりにな

った。

俺は10本全てのククリナイフが戻ってくると、倒したゴブリンの数を頭の中で計算してみた。えーっと、最初の乱射で40体、溜め撃ちで20体、十方射陣で30体。……ということは、残り10体か。

俺の頭に残りのゴブリンの数が浮かんたとき、その残り10体のゴブリンが前方から突っ込んで来た。俺はそれを跳躍で回避。何処かの国の赤い配管工よろしくのジャンプ力を見せつけ、奴らの背後にまわった。

「アハハ、おめでとさん。よくぞ100分の10、いや、10分の1の確率を生き残れたな。そんなお前らには、ククリナイフじゃない殺し方にしてやろう。」

俺はそう言っただけククリナイフを手の中に収めると、10本全てのククリナイフは積もった灰のように小さな小さな粒子となって空気中に溶け込んでいった。

代わりに俺が出現させた武器は、2振りの剣。『テグハ』という種類の片手剣だ。この剣の最大の特徴、それは、大きく反り返った剣身である。しかし先程のククリナイフのような急カーブではなく、バナナのような緩やかなカーブを持ち合わせている。それが2振り、つまり2刀流だ。

ちなみに俺のテグハは何故か剣身が黄色い。が、気にしたら負けだ。

俺が1対のテグハを出現させたと同時にゴブリン共は再び突っ込んで来やがった。それに応じるように、俺は奴らに電光石火の如く突貫する。テグハを持った両腕をクロスさせたまま。そして俺とゴブリン共との距離がほぼゼロに達した時、俺は両腕を大きく振り払った。

2本の剣が描く、^{エックス}Xの文字。それを真正面からくらったゴブリン

は5体。

「残り5体、か。
一気に決めるか。」

そう呟いた俺はゴブリン共に近づいていった。そんなゴブリン共も、戦闘体勢に入る。

全く、コイツらに恐怖心というモンは無いのかねえ。
そう思っていると、5体のゴブリンの内、4体がまたもや突っ込んで来た。前言撤回。コイツら無謀で無知なだけだわ。

俺はその4体を仲良く一斉に吊ってやった。

「残り1体。」

さしずめ、『ラストゴブリン』ってところか。」

俺がしょうもないことを言ってる内に、そのラストゴブリンはまたもや、またもや突っ込んで来た。つかコイツら突っ込んで来ることしか出来ないの？

そう思いながら俺は奴の攻撃をかわすように、跳んだ。その高さ、10メートル以上。そして呆気にとられているラストゴブリンに対して俺は、

「Go・to・heaveen!!」

(安・らかに・眠れえええ!!)」

右手のテグハを振るい落とした。

上空10メートル以上からの振るい落とした。ゴブリンなんかを防げる筈が無い。案の定、ラストゴブリンの体は俺の剣撃で縦に2つに割れていた。

「終わったか。結構他愛無えな」

そう呟きながら、俺 『ゴウ・デイベス』は両手のテグハをしま^{灰に}うと、今は死体さえも蒸発して消えていったゴ布林共と戦った廃村を後にした。

……あと今1ミリでも『ゴウ・デイベスだつて！ ダッサー』とか思った奴ら、後で職員室に來なさい。俺が直々にありがたい説教と愛の制裁を加えてやる。

Chapter 1: episode 1 (banana side)・無留

はい！

いかがだったでしょうか！？

…え？

英語のところが合ってたかったって？

…そ、そこは…

…痛いところです。

…まあ、何はともあれ、

皆さんからの感想、レビューなどを、ドシドシ書いて下さい。

お願いします。

待ってます！

Chapter 1: episode 2 (banana side) - ギ

前回のあらすじ

ゴウが派手にゴブリン1000体を葬った。

「ゴウ、もう帰って来たのか!？」

俺がギルドに戻るなり声をかけてきた人物、コイツがこの街『ビギノス』にあるギルド支部のリーダー、『マイケル』である。

「おう、マイケル。チョロイクエストだったぜ」

「チ、チョロいってお前、相手はゴ布林100体だったんだろ! ? それをお前、パーティ組んで無いクセに普通の奴らよりずっと早いんですけど! ! !」

マイケルの野太い声に反応してか、周りの連中も声を上げてきた。

「ゴ布林100体を1人で……! ?」

「しかもアイツ、さっき出発したばかりだったよな! ?」

「に、人間技じゃ無え! こ、これが……」

最後の奴が呼吸を置き、さっきよりも大きな声で、俺のダツサイ2つ名を呼んだ。

「これが、『バナナ爆風』の力なのか! ! ?」

「ブツ! !」

……自分の2つ名なのに、俺は飲んでた水を吹き出しそうになっ
てしまった。

『バナナ爆風』、これが俺の2つ名。『爆風』の由来ならまだ分かる。自分で言うのもなんだが、おそらく俺の強さと派手な戦い方、そして半年でこんな強さにまで至った俺の成長力から来ているのだ

ろう。だけど、『バナナ』って何よ？ 何で果物？ 確かに俺はバナナ大好き人間だ。バナナ主義だ。だけど、バナナが好きって理由で2つ名になるか？じゃ、何だ？この腰まで伸びた金髪を頂の^{うなじ}ところ^{うなじ}で1つに束ねているからか？ 確かに髪がいい感じに纏まってる様、バナナの如しだが……とりあえず、この場を借りて叫ばせて貰う。この2つ名付けた奴どんだけネーミングセンス無えんだああああああ！！

「そつえばさあ、」

と、ここでウエイトレスのねーちゃんが俺に直接話しかけてきた。

「『バナナ爆風』の君と『アップル暴風』って、どっちが強いの？」

『アップル暴風』。

俺と同じくギルド内で期待のルーキーとして名を馳せている人物だ。戦闘力は俺と互角くらいで、キャリアも俺と同じくらいらしいらしいというのは、まだ俺と『アップル暴風』が1度もエンカウトしてないからだ。故に『アップル暴風』の情報は風の噂でしかない。だからこそ、俺は思う。

「さてね。出来れば、1回手合わせ願いたいものだけど」

それに続けて『アップル暴風』ってこれまたセンス無えな、と呟きながら黄色い長袖のレザージャケットを脱ぎ、近くにある椅子に掛けると、俺もそれに腰掛ける。そしてそのままウエイトレスのねーちゃんにランチをオーダーした。

余談だが、このギルドは軽食屋も兼ねているからランチにはもってこいなのだ。ランチだけでなく、朝、昼、夜、全てにおいて飯食わせて貰ってる。因みに白い半袖シャツに黒いズボンという出で

立ちでカレーなんてモンをオーダーしたから、ウェイトレスのねーちゃんに若干『コイツバカか?』的な目で見られたことは秘密だぞっ!

……あ、ここで引かなくてくれる? ジョークだよ、ジョーク。

「やつ!」

「……どうした?」

俺がスパイスの効いたそれを1人で食つてると、何か爽やかなオーラを出しまくっているナイスガイな青年が俺の向かい側に座ってきた。

「君は噂によると果てしなく強いらしいじゃないか」

「……まあな」

「でも、キャリアはあまり無い」

「……否定はしねえさ」

挨拶に次いで出てきた言葉がそれだ。何だコイツ。

「そこでだ。僕が君の質問に答えようと思うんだ」

と思つたが、結局コイツはいい奴らしい。

「お、ご親切にどうも」

「どう致しまして。それで何か質問はあるかい?」

ナイスガイな青年はそうきたので、俺はまずは、と、基本的な質問をした。つーか挨拶の次には普通これを持つてくるだろ。

「……名前」

「ん?」

「だから、アンタの名前」

「あ、ああ。自己紹介がまだだったね」

ナイスガイな青年はそううなずいて、自身の胸に手を置いて名乗った。

「僕の名前は『フランス』だ。よろしく！」

「『フランス』、ね。中々いい名前じゃねえか」

軽く誉めて、さつさと次の質問に移る。

「……『アップル暴風』って何者だ？ エラく強いってことだけは聞いているんだが」

するとフランスの口から飛び出してきた言葉に、俺は少し驚いて変な声を出してしまった。

「彼女のことについて知りたいのかい？」

「ほえ！？ 『アップル暴風』って女なのか？」

「うん。しかも、歳も君とあまり変わらなかったよ」

ホントに驚いた。

まさか『アップル暴風』が俺と同年くらいの女とは思ってもみなかった。

しかしそこから後のフランスペディアは、俺の知ってることばかりだったので割愛させて頂く。

「ごめん、失敗しちゃった」

『アップル暴風』についての質問が終わった頃、そんな落胆の声が聞こえた。

その声の主は、15歳くらいの少女だった。後ろには仲間かと思われる15歳くらいの少女が2人。全員軽く武装しているので、このギルドの一員だということが分かる。

「おうおう、どうした？」

マイケルがすかさずカウンターに回る。

「聞いての通り、クエストに失敗しちゃったのよ」

そして彼女はマイケルにクエストの報告をした。

「……なるほど。意外と難しい場所だったみたいだな」

話を聞き終えたマイケルが頷いていたが、カウンターから離れたテーブルにいる俺には話の内容までは聞き取れなかった。

「ゴウ！ ちょっと来い！」

突然マイケルに呼ばれた俺は、言われるがままカウンターへと足を運んだ。つかフランスよ、何故お前までついてくる？

「……ゴウ、お前今日の午後空いてるか？」

「いや、午後はマンガ喫茶行くから……」

「そうか、空いてるのか。丁度良かった」

「いや、人の話聞けって……」

「ゴウ、コイツらと一緒にクエスト行つてこい。」

「はあ！？ ふざけんな！！ つーか何で俺が」

「か弱い淑女レディを救うのが、紳士ジェントルマンの役目だろう？」

「知・る・か！！ ンなモン！！」

「リーダー命令だ。行つてこい。」

「俺、フリーだもんね！　どこの支部にも属してないもんね！　だからリーダー命令なんか関係無いもんね！」

「たえフリーだろうと何だろうと、その支部に世話になつてる限り、リーダー命令は有効なんだよ」

「んな……！？」

D a m n i t ! ! （畜生！！）コイツ、何気に口強え！

……と、いうワケで、俺は渋々プライベートタイムを潰して、この女の子3人のパーティに一時的に加わることに。……Sh i t
！（クソッ！！）つかマイケルの野郎、何勝ち誇った面^{ツラ}してやがるんだ。やめろ、腹立つ。

俺が渋々クエスト参加の手続きをし終わった時、

「待つてくれ。そのクエスト、僕も参加するよっ！」

俺の背後から爽やかな声がした。何と、フランスもこのクエストに参加したいらしい。

「マイケル、僕も参加していいよね。」

「あ、ああ。それは構わないと思うが……」

そしてフランスはマイケルの言葉を聞くなり、慣れた手つきでクエスト参加の手続きを済ませてしまった。

ということは……

「俺、抜けた！」

俺がクエストに参加する理由が無くなった、ということでは！？　おそらくあの三人娘は男手が欲しかったのだらう。しかし、ファ

ンスが参加したことで、男手が補充された訳だ。そしたら俺は晴れていない子となるのでは!?

「いや、ゴウは強制参加だ」

……マイケルコノヤロウ。

俺は基本的に1人でやってきた。そんな俺が5人パーティなんて疲れるだけだと思うのだが。

俺がそんなことを考えていると、フランスが無言で俺に近寄って来た。

「……どうした?」

「ゴウ、だったよね?」

「ああ、合ってるよ」

「さっき言い忘れてたことがあってね」

「……何?」

するとフランスの口が俺の耳元に近付き、呟いた。

「あんまり調子に乗るんじゃないぞ、餓鬼^{ガキ}が」

そして静かにはなれると、再び爽やかオーラを放つ。

「お互い頑張ろう!」

そう言い残してフランスは例の女の子パーティの中へと入っていった。

残された俺が思ったことは、これだ。フランスって、嫉妬キヤラだったの? 嫉妬キヤラは今までに何人もいたけど、フランスよ、お前もか? ああ、もう、帰りたい……

まあ、帰る場所って言っても、ギルドギルドかホテルなんだけど。
その日の午後、俺は強制的にクエストに参加させられたのであつた。

Chapter 1: episode 2 (banana side) ・ギ

はい。今回少しグダグダでしたね。

アクション1つも入ってないし。

ゴウくんには次回で暴れまわって貰いましょうかねえ。

次回予告(嘘)

「ゴウさん、髪の毛ながいですね。どんなリンス使っているんですか？」

「パ○テーン」

乞うご期待！(だから嘘だって)

はじめに

遅れて申し訳ありませんでした!!!

理由は多々あるとはいえ、その中に『己の墮落』という理由が入っているのは事実。

今度からは出来るだけ早く仕上げたいと思います!!

少なくとも、遅れそうなときは、あらすじ部分に書き込んでおきます!

本当に、すみませんでした!

前回のあらすじ

ゴウ君、無理やりパーティを組まされ、クエストへ。

『テミタス』、それがこの世界の名前だ。

早い話、ここは剣と魔法のRPG的な世界である。

俺は3年前に、ひよんなことで日本からこの世界に来了。不本意ながらも、な。

最初は不安だったさ。言葉はちゃんと通じるのか、とか。でも、何かいろいろと補正がかかってたみたいで。

こっちの言語で相手に話したら、相手の耳には俺が^{あっち}テミタスの言語で話しているように聞こえるらしい。んで、その逆も然り、と。文字も、書かれていることが翻訳されて見える。ま、古代文字とかは無理だけど。つまり、俺にはいつの間にか自動翻訳機が搭載されたらしい。この自動翻訳機のお陰か、^{こっち}テミタスは^{こっち}テミタスでそれなりに住みやすい。

……え？

何でいきなりこんな話になったかって？ 答えは簡単。俺、スゲ工暇。

俺たちは今、馬車でヤタ遺跡っていう場所に向かっている。クエストをこなす為に。因みに今回のクエストはというと……ズバリ、^{トレジャー}宝探し。だけど、俺以外みんな絶賛爆睡中である。

うーん、何しよ。

俺がそう思い悩んでるとき、向かいの席から声が飛んできた。

「……さっきから暇そうだな」

俺に話しかけてきたこの人物、例の女の子3人組の1人だ。確か、リリアンとかいう名前だったような。

「まあな。てか、アンタ起きてたの？」

「起きてたら悪いか？」

「いや、そういうワケじゃ無いんだけど……」

……「つーかマジで暇なんだけど。 どうかして」

俺がリリアンに要求　というよりムチャ振り　すると、彼女は手を前に翳かざしたしたかと思うと、何処からともなく細剣フルーレを出現させた。そして、そのフルーレの剣身を布で丁寧に拭く。

「だったら武器の手入れでもしてみたらどうだ？」

リリアンの提案通り、俺も自分の武器の手入れをすることに。

んじゃ、とりあえずコレからかな。

そう思っ
て俺が出現させたのは、2本のかなり湾曲した片手剣。

2本合わせてその名も『双騎当千そうきとうせん』。俺命名。黄色い刃が今日も

美しい。俺はさっさと手入れし終わると、双騎当千をしまった。余談だけど、やはり黄色いテグハテグハって、この2本だけのようだ。

はい、お次はコレ。俺が飛び道具として使ってる、10本のブーククリナイフ
メラン形の短剣。10本合わせてその名も『十刃十色じゅうじんしき』。これも俺命名。コレもまたさっきと同じようにちゃっちゃと手入れしてしまふ。

はい、ラストにコレ。

うわ、いつ見てもデケー！

と、思わずにはいられないのがこの武器。大鎚おおつち『孤無双こむそう』。元は『テトラ・スペクティア・うんたらかんたら……』って名前だったんだけど長くて覚えにくかったから、俺が勝手に名付けた。

コイツは俺が4ヶ月前に見つけてギルド本部に送った物だ。んで、2ヶ月前にコイツの調査が終わってお蔵入りされそうになったところを、俺が譲ってくれて頼んで、貰った。

貰えるものは貰う。日本にいた時から変わらなかった俺の精神の1つだ。時には他人から”Greedy（卑しい）”と言われたと

きもあつたが、俺はそれに対して”Mottainai（勿体無い）”と反論していた。

ようやく武器の手入れが終わった。と、そこで初めてリリアンがさつきからこっちの方ガン見してることに気付く。どしたの？

「……随分持っているな。これらは全部お前が使うのか？」
「ん、ああ。もちろん」

俺の返事を聞くと、リリアンの顔には驚きを表す表情が現れる。その時、俺は思い出した。この世界では、武器は1人につき1種類がセオリーであることを。

「……驚いた？」
「当たり前だ……」

……改めて思う。
俺って、結構変わってんのな。

……とまあ、そんなこんなで、ヤタ遺跡にご到着しました。……
なにこれ超広い。あとかなり天井高い。でもまあ、それだけであっ

た。これといった障害物も畏^{トラシク}も無い。強いて言うなら、たまにゴブリンが5、6体まとめて襲って来るだけ。

因みに俺は1人で後ろを担当している。後ろからの奇襲を防ぐためだ。

でも、そんなことはあまり無かったから、実質サボりに近かった。はい、さっきほどじゃ無いけど、暇つす。

という訳で、前方担当の4人の戦いぶりをレポートしたいと思いまゝす。

はい、相手はゴブリン6体。

「ヤツ、ハア！」

開始早々、いきなりゴブリンに殴りかかったのは、女の子3人組のリーダー、アリシア。左ジャブから右アッパーに繋げ、ゴブリンを打ち上げる。打ち上げられたゴブリンは空中で受け身がとれず、そのまま地面に落下。直後、倒れたゴブリンに追い打つように、

「ハアアー!!」

アリシアの渾身の踵落とし^{かかとおとし}が炸裂した。これであと5体。

「ハッ、セイ、ヤア！」

アリシアが踵落としをぶちかますと同時に、リリアンも前に出た。フルーレでゴブリンの体力をじわじわ減らし、攻撃が来たら避ける。まさにヒット&アウェイだ。しかし度々避け損ねるときもある。

そんなときは、

「だ、大丈夫!? 今治すから！」

フェイが回復魔法を詠唱し、リリアンを回復させるのであった。
あ、フェイってのは例の女の子3人組の1人ね。

「すまないな、フェイ。さて、一気にいくぞ！」

リリアンは回復してもらうと、ゴブリン1体にラッシュを繰り出した。華麗なステップで繰り出される15連撃によって、そのゴブリンは消滅。残り4体。

……いや、残り2体だ。

「ロック・フォール!!」

フェイのおっとりした声が響くと、ゴブリンの頭上から人を2人程潰せそうな大きさの岩石が降ってきた。どうやらリリアンがラッシュ決めてる間に、フェイは魔法の詠唱を始めていたらしい。はい、改めて言おう。残り2体です。

「行くよ！ フツ、セツ、トリヤ、ハアッ！」

さて、残り2体のうちの1体にビシビシ矢を放っているのは、ナイスガイ腹黒夫のファンズ。

「貫け!!」

そしてその1体に止めをさす。そのゴブリンが消滅する中、もう1体のゴブリンがファンズに突っ込んできた。だが、

「甘いよ!!」

バックステップで楽々回避。そのとき、

「セイヤッ！」

接近したアリシアが隙が出来たゴブリンにサマーソルトをかました。打ち上げられるゴブリン。その落下途中、

「これで、決まりイー!!」

アリシアのアップーがクリティカルヒットし、ゴブリンは蒸気となり、消滅した。はい、という訳で、此方の4人の勝ち。お疲れ様でした。

「ハッハハー、やるじゃない！」

戦いが終わった直後、俺が賞賛の言葉をかける。その後俺、何て言われたと思う？

サボってないで手伝え、だとさ。

「こ、こんなに……!？」

「も、もう、ダメ……」

説明しよう。入口から大体1キロの距離を歩き、遂に後少しで宝のある所に着く、というのに、前方にゴブリンが15体ほど現れた。……ゴブリンと戦いながら1キロほど歩いたのだ。俺以外の4人には少し疲労の色が見え始めている。

「奮起しろ。ここが正念場だぞ」

「……いや、お前らは休んどけ。俺がやる」

リリアン　　というか他のメンバーも　　、休むって言葉、知らなさそうだったので、俺は4人に休むように促した。

「し、しかし……」

「俺に任せな。それに俺も、このままサボり扱いされたく無えしな」

「チッ、調子に乗りやがって……」

リリアンの言葉を適当な理由で遮る。

後、何かフランスが俺だけに聞こえる声でほざいてたが、スルーします。

「ふう……じゃ、やりますか。」

俺は肺に溜まったモヤツとした空気を吐き出し、2本のテグハ『双騎当千』を出現させた。そしてゴブリン共の方を向き、一言。

「サボった分の名誉挽回に、テメエ等をブツ殺しまーす!」

その言葉を合図に、ゴブリン対俺の戦いが始まった。まあ、宣言通りすぐに終わると思うけどね。

早速5体ずつ計10体ほど突っ込んで来た。前方の5体の攻撃を

受ける前に俺の一閃が放たれ、その5体は無様に消滅。

後の5体の攻撃はジャンプで回避したあと、空中で『双騎当千』から大鎚『孤無双』に武器をチェンジ。そして空中から

「ハアッ！」

思い切り振り下ろす。

ありとあらゆる力が働き、急速に落下。そして真下にいた5体のゴブリンを潰す。

「残り5体、か。」

俺はそう呟きながら、武器を『孤無双』からククリナイフ『十刃十色』にチェンジした。もちろん即座に10本全部を浮かせる。

右手をゆつくり敵の標準に合わせ、

「消え失せる！」

チャージショットを放った。

固まっていたゴブリン5体は10本まとめて襲って来たククリナイフにどうすることも出来ず、1体残らずまともにくらい、消滅していった。

まあ、そんなこんなで俺が圧勝したのだが、

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

はい、4人ともこっちガン見してます。

……………としたの？

「む……無傷……!？」

「しかも……こんなに早く終わるとは……!？」

暫く続いた沈黙はアリシアとリリアンの声で破られた。その声で俺は沈黙の意味を理解する。

「す、すごい!! すごいよ!!」

「ちょ!!?」

そのときだった。……何故かフェイが俺に抱き付いて来たのは。

「フェイ!」

「ほえ? 私の名前、覚えてくれたんですか!? 嬉しい!!」

「と、取りあえず俺から離れてくれ!」

この世界では、抱きつくことがスキンシップの一種となることがある。おそらくフェイはそのつもりで抱きついているのだろう。が、元々日本人である俺はこのスキンシップにドキドキせざるを得ない。老若男女関わらずこのスキンシップは数回程受けてきたが、どうしても慣れん。

まあ、そんなこんなでフェイを引き剥がした後、ちゃっちゃんと進み、そして遂に、

「コレが宝か？」

たからのま
宝の間に着いた。んで、その宝というのは……

「土器、か。」

フランスの言う通り、土器である。因みに女の子3人組は以前のクエストで此処まで攻略してたらしい。

……でも、此処まで来れば後はコイツを持ち帰るだけだから、さほど難しいクエストじゃ無えよな。何処が難しいんだ？

俺はそんな疑問をアリシアにぶつけてみた。返って来た答えは、

「……触ってみて。すぐに分かるから」

アリシアに言われるがまま、俺は何百、何千もの年月を重ね続けた物だけが持つ雰囲気醸し出しているその土器を手にとってみた。刹那。

その土器が突如黄色い光の帯を纏ったかと思うと、続いて遺跡の壁、床一面に土器が纏った物と同じ光の帯が広がっていった。よく見るとその光の帯には、何やら古代文字のような物が刻まれている。そして、遺跡全体が揺れるかのような音が響く。

そのときだった。

壁が、地面から生えたのは。

幾つも生える壁。そして壁は、幾重にも組み合わされていく。

「な、何だ、コレは!？」

フランスが声を上げる間にも、壁は組み合わされていく。そうして、幾重もの壁が形成したのは

「成程な。アンタらが難しいって言った意味がわかったよ」

ラビリンス
迷宮であつた。

Chapter 1: episode 3) banana side (・憤り

今の自分が言うのも何ですが、評価、感想など、ドシドシ書き込んで下さい！
お願いします！！

次回予告(嘘)

ゴウとフェイとの愛の花道、それを阻む者とは！？
乞うご期待！
(だから嘘だって)

Chapter 1: episode 4) banana side(…い

『前回のあらすじ』は、今回を持ちまして終了させていただきます。
理由ですか？

それはただ一つ！

……ダルいから。

ゲブツ！

ちょ！

石投げないで！

お、お前、止める！

デザートイーグルは死ぬから！

って

ギヤアアア……！！！！

Chapter 1: episode 4 (banana side) : い

何でこのクエストをあの3人娘が『難しい』って言ってるかがよく分かった。簡単に言うと、この迷宮、^{ラビリンス}難易度がクソ高いのだ。

いや、一目見りゃあ分かるし、フェイが飛びつきながら訴えてきたから、ね。

因みにあの土器を台座に戻すと、迷宮は無くなるらしい。

でも今回のクエストはあくまで宝探^{トレジャー}しだ。この土器持^宝って帰らんと意味無いやん。

「……フランス、何かいい案ないか？ 迷宮の簡単な攻略の仕方とか」

一応フランスに何かいいアイデアがないか訊いてみる。案の定、返答は予想通りのものだった。

「残念だけど、持って無いね」
「んー……」

迷宮の攻略は無理、か。仕方無え。

「……アレ、やるか」
「アレって？」
「まあ見てなって」

俺は顔にハテナマーク付けたようなフェイを一瞥すると、大鎚『孤無双』を手に取った。その瞬間、

「ふえ!?!」

「な!？」

「ゴウ君!？」

「ま、まさか!？」

察しのいい4人から驚きの声が発せられる。あ、因みに上からフエイ、リリアン、アリシア、ファンスの順ね。

俺は4人の声を見無視。意識を集中させるためだ。足を肩幅程度に開き……

はい、簡単に言います。孤無双をクラブの代わりにして、ゴルフの構えとつてます。詳しく言うと、ドライバーで遠くにブツ飛ばす構えで。

構えをとると、孤無双に魔力を込める。3秒くらいの間、魔力を込め、大きく一呼吸。

そして……

「デエィアアア!！」

クリティカルショット!

これ、ただの素振りじゃね? と、思う人もいるだろう。だが、違う。

孤無双が、本来ならばそこに球があるであろうところまで振られたときだった。

孤無双”自体”から、バスケットボール並の大きさの魔力弾が放たれたのは。

まるでそこに最初から球があったかのように。

その魔力弾は一直線に飛んでいき、迷宮を構成する幾重もの壁を、破壊し、破壊し、破壊した。魔力弾の弾道は、そのまま1本の道となった。

「……」

暫くの沈黙。それを破ったのも、

「あー、やっぱスッキリするわ、コレ」

俺だつた。

[illegible]

4人が見事なくらいのハモリで驚愕をそのまま表現した声を上げる。そしてそのままフェイからのハグと3人からの質問責めに会うことに。

「い、今の、何!？」

「ど、どうやっ
たんだい！？」

「わ、ワケが分からん！！」

「はう、凄いい!!」

あつはは、収集つきますん。

「つかフェイはさっきから何なんだろう？ ヤケに抱きついて来やがるし…… まさかコイツ、俺に惚れたってことは……」

……無いな。絶対。だってよ、俺ら知り合ってまだちょっとしか経ってないし、ねえ。

取りあえず閑話休題。

「……ありや？」

さてさて、俺ら一行は先ほど出来た道を通っているのだが。先頭を行っていたアリシアが突然妙な声を上げる。

「あんらまあ」

続いて妙な声を出したのは、俺。コイツは意外だった。俺は多分皆もそうだと思うが、てっきりこの遺跡全体が迷宮化したのかと思っていたのだが、そうでは無かった。

俺らの前の景色は、行きるときと同じような感じだった。特に何も無い。変わった所と言えば、床と壁に例の光の帯が書かれているだけだった。

そのとき、アリシアが何かを見つけたようだ。

「あれ？ あんな石像、行くときにもあったっけ？」

……石像？

俺も疑問に思い、アリシアが見ている方向を見てみる。

「ありや、あんな所にあったか？」

「……一応、あったぞ」

俺が声を上げると、リリアンが反応。どうやら気付いていたのはリリアンだけだったらしい。さらにリリアンは続ける。

「まあ、行くときにはあんな光の帯など、刻まれてはいなかったがな」

おおっと、これは……

リリアンのその言葉で、俺は誰よりも早く意味を理解した。迷宮化されていない場所と石像の意味を。

簡単に言っと、

「……ボス戦ですね。分かります」

俺が1人でそう呟いたのと同時に、その石像は動き始めた。

「ひゃあ!？」

「こ、これは!？」

「まさか……!？」

「ゴーレム!？」

つーかお前ら気付くの遅いわ。いや、俺が早かったのか……？
まあ、どちらでもいいけど。……つーかさ、

「リリアン、ゴーレムってそんな強いん？」

俺は、この仕事始めてからまだ半年しか経っていない。つまり、
どの魔物が強いだとかそういうのはよく分からのだ。

「な、知らんのか!？ 数ある魔物の中でもAランクを誇る魔物だぞ!！」

なんか強いらしい。その後も何かごちゃごちゃ説明された。内容を要約するとこうだ。昔の大魔術師が作り上げたもので、主にそれ

なりに栄えていた古代文明の遺跡にしか出現しない、強くてレアな大魔物。

デメリットは起動するまで少々時間がかかるという点。現に今も、少し動いただけで特に目立った動きは無い。

しかし、敵と認識した者を地の果てまで追いかけるという、はた迷惑な機能付だ。

余談だが、魔物にはランクというものが付けられている。が今は2つだけ覚えていればいい。

Aランク。コイツ等は俗に言うボスの位だ。ゴーレムの他に、竜もこのランクに入るらしい。

Cランク。コイツ等は所謂雑魚。因みにゴブリンは単体ならこれより1つ下のランク、つまりDランクにあたるのだが、群れをなす習性の為、Cランクに認定された。

……と、無駄話はこれくらいにする。もっと詳しく聞きたい人は職員室まで来なさい。美味しいバナナスイーツと共に懇切丁寧に教えてやろう。

取り敢えず、今やるべきことは、

「下がってな。ここは俺がやる」

このゴーレムおいちゃんにバナナの良さを伝えることだ。肉体言語で。

「なーに、俺1人で十分だよ。だから、俺に任せな」

俺の言葉を驚きながらも素直に聞き入れたアリシア、リリアン、フェイの3人はすぐさま下がる。そう、アリシア、リリアン、フェイの3人だけ。

フランスは俺に歩み寄って来るなり、いきなり俺の胸ぐらを掴んだ。

「!？」

「ひゃっ!？」

「フランスさん!？」

驚く3人娘。しかしそんな3人には目もくれず、フランスは俺に向かつて、

「テメエ……自惚れんなよ……!」

本性をさらけ出して、キレた。

フランスの豹変ぶりに驚きと戸惑いを隠せない3人娘。しかしフランスはお構い無し。

「幾らテメエが強いつたって、あんなのに1人で勝てるワケが無えだろうが!」

ガクン、と俺の体を揺らす。そして一度吸気を取り込み、フランスの口から出た言葉に、俺は驚かざるを得なかった。

「テメエは何で協力しねえんだ!! 1匹狼気取りか!? だったらそんな変なプライドなんか捨てちまえ!!」

驚愕と共に困惑する俺。しかしフランスの言葉は続く。

「もつと仲間を頼れよ！ そんなんじやお前……、いつか、自滅しちまうぞー！」

そう言い放って、フランスは俺を乱暴に解放する。

しばしの沈黙。先程から俺の心の内は驚愕と困惑の念が渦巻いてばかりだ。

何故、フランスの口からそんな言葉が出る？ フランスは俺を目の敵にしているのではなかったのか？

俺の疑問は深まるばかりだったが、それを解決したのはフランスの独白であった。

「……僕はお前に嫉妬していた。僅か半年で、あつという間に僕らを抜いてしまったお前に」

でも、と、彼は言葉を続ける。

「それ以上に、憧れていた。人々から信頼され、仲間の危機に颯爽と現れ、救いの手を差し伸べる君に」

落ち着いてきたのか、フランスは俺のことを『お前』ではなく『君』を使って表すようになった。……仲間の危機を云々かんぬんは多分噂に付いた尾鰭おひれであろうが。しかしここで口を出す程俺は馬鹿ではない。

「僕にとつて、君はヒーローなんだよ！ だから僕は、そんな君を目標にしたんだ！」

見れば、あの3人も、フランスの言葉に聞き入っていた。

「だから！　こんなところで、君に自滅なんかして欲しくないんだよ……！」

何ということだろうか。フランスは俺を妬みながらも、俺を目標にしているとまで言ってくれた。俺は知らない間に思わぬ人間から尊敬されていたのだ。

崩れ落ちるフランス。それと同時に、3人娘が俺の元に近寄ってきた。

「……私達も、懂れていたんだよ。ゴウ君、君に」

アリシアが、言葉を紡ぐ。一語ずつ、丁寧に。一語一語に、思いを乗せて。

「だから、お願い。君に、協力させて」

ああ、俺は、いつの間に人に尊敬される存在になったのだろう。フランスの言葉、アリシアの言葉。2つの思いが俺の心にじわりと染み渡る。

……だけど、

「悪いが、それは無理だ」

俺は、2人の思いを受け取らなかった。

「な、何で!？」

というより、受け取れなかった。受け取れたとしても、協力出来るのは、精々フェイくらいだ。もしかしたらアリシアも協力出来るかも知れないが。

「私達では、役不足だというのはか!？」

アリシアに続いて、リリアンも食い下がってきた。

正直、俺は皆の期待に応えてやりたかった。俺に協力させてやり
かったし、俺も協力しなかった。

しかし、

「……アイツ、石だぞ。剣とか弓矢と違って、アイツに効くのか?」
「……あ」

いち早く反応したフランス。どうやらフランス達は熱くなりす
ぎて初歩的なことを忘れていたらしい。

ここで今いる5人とゴーレムとの相性について考えてみよう。

まず俺。獲物云々の前に、俺はオールラウンダーだ。さらに体の
スペックが人間やめましたレベルなので、ゴーレムに対する力を持
ち合わせていない訳がない。

フェイ。彼女は魔法使いだ。ゴーレムに対抗出来る魔法の1つ位
持ち合わせているだろう。

アリシア。己の拳を武器とする彼女にとってそれなりに硬い相手
とは相性抜群であろうが、ゴーレムは硬すぎる。殴り続けたら彼女
の手の骨がおじやんになってしまうのは目に見えている。

リリアン。剣は剣でも両手剣などの叩き斬ることに主軸を置いた
剣であつたら対抗出来ただろう。しかし彼女の獲物は細剣。ポツキ
リ折れるのがオチだ。

そしてフランス。最早何も言うまい。

以上のことから、対抗出来るのは俺と、もしかしたらフェイ。し
かしアリシア、リリアン、フランスの3人は望みを絶たれた訳では
ない。『粉碎スキル』という物があるのだが、それを習得している
なら話は別だ。

「という訳で、アンタ等、粉碎スキル持ってる？」

「……持ってない」

「……アリシアと同じだ」

「……僕も」

残念だが、仕方ない。そう思いながらこの3人に戦力外通告を言い渡す。

ファンズが声を上げてうなだれるのと同時に、アリシアとリリアンもがっかりとしたような表情に。3人とも顔文字のような表情でうなだれている。ショボーンという効果音が聞こえてきそうだ。

「あ、あの、私は……」

そう訊いてきたのはフェイだ。この空気の中、よくぞそんなことを訊いてくれたものだ。

確かに、フェイは4人の中で唯一ゴーレムと戦える見込みがある。あるのだが、

「悪いけど、フェイも駄目だ」

「な、何ですか！？ ゴーレムに対抗出来る魔法も持っているのに……」

「もしここで戦闘に参加してみる。後で絶対『フェイちゃんだけずるーい！』って空気になるから。だから君も見学していなさい」

という訳で、ショボーン1人追加。結局俺1人で戦うことに。

「……ん？」

その時、何か鳴き声のようなものが聞こえた。ような気がした。

耳を澄ます。ギャー！ギャー！と、ここに来る途中にも聞いた鳴き声が。

「……チツ」

その鳴き声の主は、どうやら此方に近付いてきているらしい。面倒なことになってきた。

煩わしい鳴き声が近づけば近づく程、俺の顔に皺が寄る。しかしそれと反比例して、後ろの4人から負の感情が消えていくのが分かる。……どうやら思いを無駄にすることは無くなったようだ。

「フランス、アリシア、リリアン、フェイ」

俺は4人の名を呼ぶ。そして、

「頼んだ」

アイツ等の思いを受け取り、俺の背中を預けた。任されたのが余程嬉しかったのか、一気に表情が明るくなる4人。

「ああ！」

「まかせて！」

「分かったよー！」

「心得た！」

そしてゴブリン達が姿を現し始めた。その数、30。

「行くぞー！」

「「「おおッ！ー！」「」「」

リリアンのかけ声と同時に、4人はゴブリンの群れに突っ込んでいった。

「あーらら、元気があって喜ばしいこつたい」

そんな4人を俺は微笑ましい気持ちで見送り、

「……で、お前も準備OKか？」

ゴーレムの方に体を向ける。

するとゴーレムも徐々に体を動かし始める。完全に起動したようだ。

「……You are ready to die（……死ぬ覚悟は）」

俺は闘気を剥き出しにし、

「aren't you（出来てんだろうなア）！？」

ゴーレムに向かって駆け出していった。

Chapter 1: episode 4) banana side (い

次回予告！（嘘）

アリシア「みんなー、

ゴーレム体操、始めるよー！」

乞うご期待！

Chapter 1: episode 5 (banana side)・ボ

文体を少しだけ変えました。

これからは、段落(?)に や などを付けていき
きたいと思います。

感想、アドバイス、レビューなど、ジャンジャン書き込んで下さい
！ お願いします！

「ハッ！」

ゴーレムの腕が、足が、俺の行く手を阻むように繰り出される。

その巨体を活かしたパンチやキックはかなり広範囲まで届くものだが、攻撃を繰り返すスピードはそこまで速く無い。

「よッ、ハハッ！」

俺はそんなとろい攻撃を避けながら接近し、がら空きになった懐目ふところ掛けて跳ぶ。

そして、

「よいしょオー!!」

大鎚『孤無双』の豪快な一撃を放つ。

流星相手は石。

ブツ飛ばすことは出来なかった。

それでも、ダメージは確実に与えられただろう。
それにしても、

「オイオイ……」

コイツの攻撃には難ありだ。

「フランス達に当たったらどうすんだよ……」

コイツの攻撃は、リーチがクソ長い。

だから、フランス達のところまで行き渡る可能性があるのだ。
そしてそのフランス達はゴブリン共との戦闘に気を惹かれている。
そこにゴーレムの攻撃でも来てみる。
下手すりゃ一気に戦闘不能になるぞ……。
こりゃ、フランス達に注意すべきだな。

「オイ、フランス！アリシア！リリアン！フェイ！」

俺に向けられたゴーレムの攻撃。

俺はそれらを避けながら話を続ける。

「いいか？」

俺は敵の攻撃は！」

ゴーレムが俺を踏みつけようとしたが、それも回避。

踏みつけられたところが決れ、石畳の一部が飛んでくる。

ついでだからそれらを孤無双で打ち返す。

「基本的に避ける！」

防御は苦手だからあんまりしない！」

今度は俺に向けて右ストレート。

これもサイドステップで回避。

「だから！」

ゴーレムがすかさずローキックを放ってきたのでジャンプで避け、
そこから空中で『エア・フロア』という無詠唱魔法を発動。
そこにある筈の無い壁を蹴るようにしてゴーレムに接近し、そこか
らさらに『エア・フロア』を発動。

これまたある筈の無い足場を蹴ってゴーレムの頭上まで来ると、

「だらあ！」

ゴーレムの脳天目掛けて孤無双を振り下ろした。

しかし、やはり石相手に孤無双を地面まで振り下ろし切ることは出来なかった。

俺はゴーレムの頭を足場にして後方に跳躍。

ファンズ達4人の近くに着地すると、

「自分の身体は自分で護れよ」

言いたいことを言い切って、再びゴーレムに目を向けた。

その時、何体かのゴブリンが俺目掛けて襲ってくるが、

「邪アアアアア！」

左足を軸にした孤無双の360度の回転攻撃により、呆気なく消滅した。

そのついでに、残りのゴブリンの数を数えてみる。

「お、残りは13か。

あともう一息だ、頑張れ」

…俺、何かマズいこと言った？

何でアンタら黙りしてんの？

「いや…」

ん？

どうしたアリシア？

「その内の7体は、今ゴウ君が倒したんだけど…」

…マジでか？

でもまあ、

「あと13体いるんだ。
氣イ抜くなよ」

俺はまたゴーレムの方を向く。

…コイツは驚きだ。

「ゴーレムって、魔法使えたのな」

ゴーレムの足元には魔法陣が展開されており、右手を此方の方に向けている。

その右手の先には、魔力が溜まりつつあった。

「ゴブリンは後だ！

今はとにかくずらかれ！」

俺の言葉を合図に、5人共それぞれ別々にずらかった。

ゴーレムが必ずしも俺だけを狙ってくるというワケでも無いからな。
だから4人にも促したワケだが。
さて、誰を狙う？

ふと、俺はゴーレムの右手の先 つまりゴーレムの狙いの先を
見てみた。

……俺じゃ無い。

アイツの右手は俺の方には向いていなかった。
ゴーレムの狙いは、フェイ。

「チツ、よりにもよってフェイかよ……！」

フェイは今回のパーティの中では1番遅い。
加えて、運動神経も悪いから……

「ひよわっ！」

ほーら、コケた。

それと同時にゴーレムは魔法の詠唱 ゴーレム喋れないけど
が完了したらしい。

フェイにビームを放とうとする……ってウオオオオイ！！

このままだとフェイは確実にお陀仏だ。

その図が頭に浮かんだ瞬間、フェイに向かって一気に駆ける。

「そおおおい！！！」

俺はタツクルをかますような感じでフェイに抱き付くと、空中で反
転し、俺が下に来るような感じで石畳に滑り込む。
間一髪、ビームの回避に成功した。
危なかったZE

「だ、大丈夫ですか……!?」

フェイの声が聞こえる。

「…そりゃ、こっちのセリフだ。
ケガ無えか？」

そう言いながら状態を起こ　　せなかった。
フェイが俺の上に跨った状態であつたからだ。

「フェイ、そろそろ退いてくれ」
「ひゃわっ！」
す、すみませーん！」

フェイが俺の上から退こうとする。
その時、見えた。

ゴーレムが足を半歩ほど下げ、今にも蹴りを放とうとしているのを。

「！！」
フェイ、すまん！」
「ふえ！？」

とつさに手を取り、フェイを引き付けて再び抱きかかえる。
刹那、フェイの髪をゴーレムの左フックがかすめる。

「ッ…」
危ねえなオイ」

俺はフェイを退け、立ち上がる。

「あ、あの…」
なんすか？

「ありがとうござ」

礼ならギルドでたっぷり聞くから、さっさとゴブリン倒しちゃって
「はい」

こんなことだろうと思った。

まあ、いいや。

俺がフランス達の方に目を向ける。

おーおー、何だ、善戦してんじゃん。

んじゃ、俺もうだうだしてらんねえな。

……少し、本気出すか。

そう思ったとき、ゴーレムが俺に踵落としを繰り出そうと、右足を
上げていた。
だが、

「隙だらけなんだよ！」

俺は今までよりも速いスピードで奴の近くまで接近し、

「ブツ飛べ！」

全体重が掛かっている左足に会心の一撃をブチ込んだ。

重心がブツ飛んだことにより、ゴーレムは転倒。

そこからはもう、ずっと俺のターン、スーパーフルボッコタイムで
あった。

そうして十数発くらわした時、奴の胸部辺りにヒビが広がったの
が確認出来た。

それを見ると、孤無双に魔力を込め、そして、

「はい、お疲れ様でしたア!!!」

とどめとして、ヒビの中心部目掛けて、一気に振り下ろした。
直後、遺跡全体に”何か”が壊れる音が響いた。

俺達が無事ギルドに帰還した頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。
た。

いや、一応街の街灯がちらほら灯っていたけど。

「ひゃゝ、こりゃあ流石の俺でもビックリだ」

そして今、俺達はマイケルに報告している最中である。

長年この街のギルドリーダーをしているマイケルでも、ゴーレムを
1人で しかも目立った外傷も作らずに 倒した奴に会っ
たことは無かつたらしい。

「ゴウ、お前はホントに……」

「…あのさ、俺のことはもういいから、さっさと宝預これかってくんね
？」

これ以上放つといったら話が進まなくなりそうだったので、俺が無理
矢理話を元に戻した。

さて、報告も完了し、やっとクエストも終わり、俺は1人で夕食を取ろうとしているのだが…

「……………」

…さっきから俺の向かい側にアリシアが仁王立ちしてるんすけど。しかも何かガン見してきてるんすけど。…どしたの？

「……………」

しかし、アリシアはただじっとこちらをガン見し続けている。

このまま何もしないでいるのにも耐えられなくなったので、さっさとメシ食ってしまおうと思い、メニュー欄を手取る。

その時、アリシアが動いた。

かと思うと、俺の手からメニュー欄が消えた。

犯人は言わずもがな、アリシアだ。

「…何だよ」

こちらら腹減ってんだ。

何してんすかこのアマ。

嫌がらせか？

などと思ったが、アリシアから出た言葉は意外なものだった？

「1人で食べてて美味しい？」

…ああ、そういうことか。

つまり、

「一緒に食べよ?」

…先に言われちゃった。

アリシアはさっさとあの3人のいるテーブルに着いていた。
何だったんだアイツは…

…まあ、こんなのもいいか。

俺は一息つくと立ち上がり、

「へいへい、今行くっつーの」

眩きながら、夕食時の喧騒を掻き分けていった。

Chapter 1: episode 5 (banana side) : ポ

次回予告(今回はホントかも)

夜にゴウを待ち受けていたものとは

!?

Chapter 1: episode 6) banana side ;

4月29日：第5話の後書き（あのどーでもいい次回予告）を修正しました。

∴何かスマソm（――）m

「わ、私、あなたのことが好きです!」

いきなり何言い出すんすか。

はい、俺は今フエイに絶賛告白中です。

告白中といっても、俺がされている側なんだけどね。

「っ、付き合つて下しやい!」

あ、噛んだ。

……しかしまあ、フエイが俺のことを好きだとはねえ。

薄々そんな予感はあるけど、まさかホントになるとはねえ。

……ハハッ、本当に、驚いたよ。

……気持ち嬉しいさ。

でも、

「……ごめんなさい」

俺は呟くような、しかしよく響く声を出しながら頭を下げた。

俺が断った理由は実に簡単。

俺は、旅人だ。

丁度半年前から旅をしている。

この街、ビギノスにも1週間前に訪れたばかりだ。そして俺は近い内にこの街を出るつもりでいる。

そんな俺なんかと付き合ったら、どうなると思う?

……無理矢理旅することになるぞ。

俺は別にそうなくてもいい。

だが、フェイはどうなる？

アイツには、アリシアとリリアン頼れる仲間がいる。
尊敬できる先輩
フランスやマイケルもいる。

……そんな大切な仲を、俺なんかのために捨てては駄目だ。
そう思ったから、断った。

……それで無くても、断ってたが。
何故かって？

……すまんが、フェイを恋愛の対象として見ていなかった。
ええ、それだけです。

あと、さっきの理由も含めて、
断った。

そう伝えたとフェイは、

「……そう……でしたか……」

力無くうなだれ、

「………なら、」

かと思うと、いきなりバツと顔を上げて、

「シネ」

そう呟き、何処からともなくリリアンのフルーレを取り出し……

「ってウオオオオオイ!!」

何!?

どうしたフェイ!?

「取りあえず落ち着け！！」

そうやって見たものの、フェイはお構い無しに襲いかかってきた。

[illegible]

ずっと叫びながらラッシュ決め込んで来るフェイ。

「だから、**落ち着けて！**」

適当に回避する俺、

[illegible]

ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ね
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死
 ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死ねシネ死

プ
チ
ー
ン。

俺の脳内で、何かがキレる音がした。分かってる。何がキレたのかは。そう、分かってる。

だってキレたのは、俺だから。

「……落ち着け、つて」

俺は振り下ろされるフルーレを片手で握り、

「言っ
てん
だろ
うが
アア
アア
アア
!!!」

そのまま、フェイの鳩尾に思い切り膝蹴りをいれた。崩れ落ちるフェイ。

「ふう……」

ひとまず、落ち着いた。
かに思えた。

「ウホウホ」
「キーキー」

こゝこの声は……

「ウホ！」
「キッ！」

…… 1つ言わせて下さい。

「アリシアさんリリアンさん、アンタら何してんすか!？」

見るとアリシアは何かウホウホ言いながら耳に胡瓜を入れようとしている。

そしてリリアンはキャーキャー言いながら鼻にマラカスを入れようとしている。

…ワケ分かんね。
刹那、

「ウホウホホーイ!!」
「キャキャキャキャース!!」

2人が襲いかかってきた。

俺はフェイの時のように慌てはせず、最初から冷静だった。
2人が距離を詰めてきた瞬間、

「ハッ！」

アリシアに右ストレートを、

「セイヤア！」

リリアンに回し蹴りをプレゼントしてやった。

遙か彼方に吹っ飛んでいったお二方。

俺、そんなに強くやって無えぞ…

しかし、俺は予想出来なかった。

最大の惨事が襲来してくることを。

最大の惨事、それは…

「ゴウちゃん」

……オネエ言葉を使い、

「私を受け取って」

……バニーガールの格好をしたマイケルが、大量に空から降ってきたことだ。

「う、うわあああああ！！」

俺の悲鳴が、辺りに響いた。

「
という、夢を見たんだ」

時刻は朝の8時。

俺はフランスと一緒にギルドで朝食を取っていた。

「…何と言つか、お疲れ様」

フランスは哀れみの目で見てきている。
と、そこに、

「おはよーございますー」

フェイが挨拶してきた。

「あ、ああ…」

「お、お早う」

あんな話の後なので、俺らはぎこちない感じでしか挨拶を返せなかった。

「あ、あの、ゴウさん」

ん、ど、どうした？

「…少し、お時間よろしーですか？」

そう言うフェイの顔は、熟れたトマトのように赤かった。

「…マジ…すか…！？」

…俺、どうなっちまうんだろうな………

ついカッとなつてやった。

今では反省してません。

Chapter 1: episode 7) banana side (・告

グダグダ注意報を発令します！

あの後ですか？

ええ、予想通り告白してきましたよ。

……丁重にお断りさせて頂きました。
俺が見た夢と同じように。

「そうですか……」

来るぞ……

「なら……」

来る……

「仕方ありませんね」

来た！

……って、あれ？

「お、怒らないのか？」

声をすばめて訊いてみる。
返答は……

「怒りませんよ。
だって、」

彼女は呼吸を置くと、

「ゴウさんに罪は無いですもの」

そう言つて、微笑んだ。

……良かった

てつきり、死ねシネラッシュがくるかと思つたわ

「……何か、ゴメンな」

「いえいえ、

逆にスッキリしましたよ」

「……そうか」

「では、私はこれで！」

走り去つていったフェイ。

……何というか、悪いことしたな。

罪悪感が……

……え？ 何故かつて？

……だってさ、

アイツの目、煌めいてたから、

……濡れていたから……

「ゴウ、少し話がある。
時間いいか？」

時は変わり、昼飯時、マイケルが話しかけてきた。
……顔を赤くして。

「あー、俺はガチホモじゃ無いんでね。
お断りさせて貰うわ」
「違う！」

あれ、違うの？

「顔が赤いのは、キムチ食ったからだ！」

ああ、そういうことか。
つかこの世界にキムチあったのな。
それはそれでビックリだわ。

「…で、話って？」

取りあえず訊いてみる。
するとマイケルは俺の耳に近付いてきた。

「いいか、よく聞け。
実は……」

俺は次の瞬間、マイケルの言葉に我が耳を疑った。

「魔王が、復活する」

「……は？」

俺はマイケルの言ったことを聞き間違えたのか？
そう思い、マイケルに再度問い直すが、

「魔王が復活する」

返ってきた答えは先ほどと同じものだった。

「この街の広場に」

オマケ付きで。

「え？ 何？

魔王いるの？

つか、いつ？」

「明後日の夕方」

「早えよ！！」

明後日！？

何？ 馬鹿じゃね！？

マイケル馬鹿なの！？ 死ぬの！？

「このことはまだ皆には言って無い。

ゴウ、お前だけにあらかじめ伝えておこうと思ってな」

何？ 俺にどうしろと？

「いや、誰かにあらかじめ話しておくとか安心してやるじゃん」
「知らねえよ！」

何だよその理由！

「皆には明日の昼過ぎに伝えようかと思うんだが」

「遅いわ！

今すぐ伝えてこい！早くしねえと潰すからなアアアア！！！」
俺のシャウトと同時にマイケルは走り去っていった。

そして夜。

俺達は今、ギルド全員＋で会議中だ。
もちろん、明日魔王が復活するからだ。
んで、＋というのは、

「皆、こちらにいらっしやるのは、魔王復活の予言をなさった大魔導士、ガロン様だ。」

……マイケルの紹介の通り、ガロンとかいう大魔導士兼予言者の爺さんだ。

何でもこの爺さんの予言は今までもほぼ100%の確率で当たってきたらしい。

その爺さん曰く、

「魔王を封印するには『聖なる剣』が必要じゃ……」

『聖なる剣』が見つからん限り、再び封印するのは無理じゃ……」

それに見つかったとしても、『聖なる剣』は『選ばれし者』しか使えぬ……」

じゃから、魔王を封印するのは無理じゃ。」

……とまあ、こんな感じらしい。

さらに爺さんは付け加える。

「『聖なる剣』が無くとも倒せることは倒せるが……」

3ヶ月もすればまた復活するじゃろうて……」

「さ、3ヶ月……」

空気が絶望の色に染まっていく。

結局その後も議論が交わされたが、出された結論は、

『明日から明後日の昼過ぎまでに住民を避難させる』

というものだった。

そしてついに、その日は来た。

「よし、これで全員だな」

マイケルは確認を取ると、

「よし、俺達もさっさと避難するでしょう」

自分達も避難しようと馬車に乗り込んでいった。

「…………ふっ」

俺は活気の失せた街を見て、溜め息をついた。
何というか、すっかり寂しくなっちまったな……

「おい、ゴウ！
さっさと乗れ！」

ボーっとしていた俺にマイケルが声をかける。

「あー…
先に行っというて」

適当に返事する俺。

「な!？」

驚きを隠せないマイケル。

「あー、勘違いすんなよ。

ちよつと、野暮用があつてね。

直ぐに合流するから先に行っておいてくれよ」

そう補足しておく。

「……分かった。

直ぐに来いよ!」

「へいへい」

走り去っていく複数の馬車。

そして街から、人が消えた。

俺1人を除いて

「日が傾いてきたな……」

辺りをみると、日が沈もうとしていた。

「しかし、ホントに来るのかねえ」

そう呟きながら、俺は広場の入り口でうろつろしていた、

その時、

ピキインー！！

妙に高い音と共に、広場の中央に紫色の魔法陣が描かれた。

「ようやくお出ましかい……」

辺りに地響きが起こる。

そして、魔法陣の中央から光が発せられた。

「^{マブツ}眩ッ！！」

思わず目を閉じてしまった。

「…フン、久しぶりだな……人間界は」

不意に、貫禄を持った低い声が聞こえた。

目を開けると、慎重3メートルくらいの大男がいた。

蒼髪で紅眼、褐色の肌の持ち主だ。

黒い服に黒いパンツを纏い、それを包み隠すように羽織られた紫色のマント。

そして何より印象的だったのが、こめかみの辺りから生えている、2本の禍々しい角。

間違い無い、コイツが魔王だ。

「……アンタが魔王か？」

取りあえず訊いてみる。

「如何にも。

我が名はバミューダ。

魔物の頂点に立つものなり」

返ってきたのは、予想通りの答え。

「ふーん。

ところで、アンタこれからどうすんの？」

こちらに一応訊いてみる。

あーあ、「どこか適当な職を見つけて生活する」とか言ってくんねえかなー。

「もちろん、この世界を征服する」

こちらにもまた予想通りの答えが返ってきてやりましたよ。ちくせう。

「して、貴様は何者だ？」

あ、俺？

「俺は……ただの一般人だ」

適当に返しておこう。

「フン。」

で、貴様の目的は何だ？」

俺の目的、ねえ…

「そりゃもちろん、アンタの野望をを止めることだ」

「戯れ言を……」

「戯れ言、ねえ…

俺からしちゃあ、アンタの言ってることの方が戯れ言に聞こえるけどな」

「黙れ！」

突然吠えたかと思うと、魔王バミューダは剣を出現させると、そのまま俺に斬りかかってきた。

俺も手早く2本の曲刀^{デグハ}『双騎当千』を取り出して剣を受け止めた。つたく、防御しちまったじゃねえか…

「ほう、面白い！」

人間如きが我に刃向かうとはな！」

「あ？

あんまり人間ナメンじゃねえぞクズが！」

しばらくの鏖迫り合いの後、互いに後退すると、

「人間よ！！

我に刃向かったことを後悔するがいい！！」

「Back to hell！！

（もう1回眠つとけ！！）」

暴言という名の決戦状を叩きつけたのであった。

Chapter 1: episode 7 (banana side)・予告

感想を書いて下さった方々、お気に入り登録して下さい下さった方々、そして全ての読者様、本当にありがとうございます！！
これからも頑張っていきたいと思っておりますので、これからも宜しくお願い致します！！

次回予告（もちろん嘘）

ゴウとバミューダのイケナイ関係が始まり…！？

乞うご期待！

m (— —) m m (— —) m m (— —) m
遅れてすみませんでしたアア!!

m (— —) m m (— —) m m (— —) m

「ハアッ！」

「セラッ！」

剣戟が飛び交う。

紫の軌跡、黄色の双光。

「セイツ！」

それらが描くは煌めく火花。

「ぐう！」

それらが奏でるは戦場ならではの狂想曲。

「ハイヤ！」

「だらあ！」

はい、ども。

ゴウ・デイベスです。

俺は今、絶賛決闘中です。

しかも相手は魔王とききました。

多分Sランクは軽く越えてるだろうね。

「フッ！」

「おっと！」

うは、コイツやっぱ強え。

さっきから俺は剣による防御しかしていない。

さっき言った『剣戟が飛び交う』ってのも、厳密に言えば相手が攻めてこっちが受ける、ということだ。

しかも多分アイツはまだ様子見の段階だろう。

一撃こそ重いものの、奴の様子からしてまだ本気は出していないように思われる。

……ま、かく言う俺もまだ様子見の段階なんだけど。

「セイツ！」

「オラ！」

しかし、このままじゃ何も進展しねえな。

そろそろ反撃といきますか。

「ハアッ！」

魔王ことバミューダの突きが向かってくる。

しかし俺は体を捻って軽く回避し、そのままバミューダの背後に。その勢いを逃さないように、その勢いを剣に乗せ、

「っらあ！」

バミューダ目掛けて斬りかかる。

しかし、奴はその紫色の大剣　大剣って言うても、目の前のコイツは片手で軽々と振り回しているのだが　で俺の一撃を受け止める。

「チッ！」

バミューダは小さく舌打ちをし、バックステップで俺と距離を取ると、

「混沌に埋もれし闇の巨人……………」

何かブツブツと独り言を口にした。

その間、奴の足元には魔法陣が現れていたので、十中八九魔術の詠唱と見倣^{みなして}して間違いないだろう。

「ブツブツ五月蠅えよ！」

今が好機。そう認識した俺は奴に肉薄し、右の曲刀^{テグハ}を振りかぶる。
が、

「なっ！？」

俺の一撃は、奴に容易く防がれた。

詠唱しながら、剣を使ってきた。

しかし、右手は防がれたが、左はまだ残っている。

それを瞬時に察した俺は、左の曲刀^{テグハ}を奴目掛けて振り下ろす。
しかしそれも、奴は詠唱しながら避けやがった。

「クソ！」

思わず愚痴をこぼしてしまう。

それくらいに有り得ないのだ。

詠唱しながら何か別のことをする、ということは。

普通の奴ならば、術の詠唱をするときは周りが見えなくなるくらい
の集中力が必要とされると言われている。

何か別のことをするのならば、まず詠唱を止めることが一番に優先

されることになる。

つまり、詠唱しながら何か別のことをする、なんていう芸当は、普通の奴らには不可能なのだ。

改めて実感させられた。

そんな芸当を軽くやってのけるコイツは、まさしく、

化け物だ、ということに。

「『ゲヘナ・ヒガンテ』!!」

なんだかんだで詠唱を完了させたバミューダの声が響き渡る。

それと同時に奴の右肩辺りからドス黒くて丸太のように太い腕が生えた。

「いくぞ」

そんな腕を生やしたバミューダがこちらに接近してきた。

「ハッ！セイ！ハアッ！………！」

繰り出される大剣と黒腕のラッシュ。

俺は剣の方は受け流すような感じで、黒腕の方はとことん回避して奴の攻撃をいなす。

「どうした人間！？ 貴様の力はそんなものか!？」

「あ！？ 五月蠅えな!!」

相手が何か挑発してきやがったので、こちらも適当に返しておく。

口調が荒いのはご愛嬌ってことで。

……っか、このままやられっ放しつても何か気に入らない。
なので、ここからまた反撃を開始することに。

「セイヤアア！」

一際大きな声を出したかと思うと、奴は黒腕を俺目掛けて振り下ろしてきた。

直後、けたたましい音が響き渡ったかと思うと、辺りが土煙に覆われた。

かと思えば、すぐさま静寂が訪れる。

「フン、終わったか」

その静寂も一瞬。

それを破ったのは、バミューダの呟き。
それと、

「ウオオラア！！」

大鎚『弧無双』を装備した、俺の雄叫び。

「な！？」

「ブツ飛びな！！」

バミューダは雄叫びによって俺の生存に気付いたらしいが、もう遅い。

バミューダが振り向いた直後、奴は思い切り吹っ飛んだ

実はこの俺、見事回避に成功していたのだ。

まあ、このくらい訳ないが。

その後土煙を利用して俺は奴の背後に回り、曲刀『双騎当千』をし
まうと、弧無双を出現させる。

そして、ドカンと一発、ね。

でも流石は魔王。

華麗に受け身を取ると、これまた華麗に着地しやがった。

全く、タフな奴だ。

何時頃終わるか見当がつかねえや。

「……人間よ」

バミューダが俺に話しかけてきた。

「今のは効いたぞ……！」

その声からは、俺を見下した感じはしなかった。

「人間、名は何という？」

「……へ？」

何故かバミューダが名前を訊いてきた。

「……ゴウ。」

ゴウ・デビス、だ」

理由は分からないが、損することでは無いと踏んだ俺は、素直に名
乗ることに。

「……そうか。」

いや、何、お前をそこらの人間と一緒にするなど勿体無いと思って
な」

俺が欲してもいない理由をバミューダは淡々と語ると、

「ゴウ・デビスよ！」

今し方知ったばかりの俺の名を呼び、

「これから我、バミューダは真の力を解放する！」

堂々と宣言してきた。

その途端、バミューダの体を黒い”何か”が包んだ。

その”何か”こそ、言い表すなら、まさしく”闇”。

「その目に真の絶望というものを焼き付かせてやろう！」

”闇”の中から奴の高らかな声が聞こえてくる。

それと同時に、”闇”が吹き飛んだ。

「な……」

俺は思わず、絶句した。

”闇”を吹き飛ばして現れたバミューダは、姿形が変わっていた。

その姿、まさしく”魔王”。

奴の体の周りには先ほどの”闇”と同じようなものが真夏の道路の
塵気楼のように漂っており、

奴の角は伸び、

奴の目の白色は黒色に変わり、その中心に佇む紅色をさらに目立た
せ、

奴の紫色のマントは左右対称に綺麗に裂け、翼のようになった。

さらに、奴の背後にはギリシア文字の『』を彷彿させるような魔

法陣、というよりは聖痕が具現化したようなもの　まあ、相手が魔王というだけに、”聖”痕という表現が正しいのかは甚だ疑問だが　が2つほど描かれている。そんな姿で、バミューダは浮いていた。簡単に言つと、あれだろう。

RPGにはお決まりの、魔王特有の”第2形態”という奴だろう。

「これが我の、力の全てだ!!」

まるで王が民衆に演説するような口振りでバミューダは言葉を発した。

そして、俺は思った。

面倒臭えのが相手になった、と。

Chapter 1: episode 8) banana side)・魔王

中間テストめ……
忌々しい奴よ……

○ ○ 次回予告 ○ ○

ゴウvsバミューダ、戦いはさらにヒートアップ！

乞うご期待！！

Chapter 1: episode 9) banana side(・魔

今回短いです。

だって急いでたんだもん！

「いくぞ！」

ゴウ・デビイイイス！！」

突如第2形態となったバミューダ。

そんなバミューダが俺の名を叫び、剣を掲げた。

するとそこに、膨大な魔力が蓄積される。

そして、

「ハアアアアア！！」

突きを放ってきた。

一その場から1歩も動かずに《……………》。

そして、剣の先から、特大の衝撃波が放たれ、俺に迫り来る。

「な！」

何て魔力だ！

これじゃ流石の俺も避けられ

る！

「よつと」

「！？」

軽く避ける俺。そんな俺にバミューダは少々驚いてるご様子。

「H A H A H A ～」

俺がこの程度の衝撃波でどうにかなると思っただけか？」

気分上場でバミューダに言ってやった後、ふと振り返ってみると、

「…………アレ？」

何か街がエライことになっていた。

街に、横穴がぽっかりとあいているのだ。

まるで何かに刺突されたような感じになっていた。

…………これはもしかして…………

「クッ！」

我の刺突を避けるとは…………」

もしかしなくてもコイツだった。

「ならば…………

これならどうだ！」

奴は声を荒げると、その場から動かずに右手を胸元に持って行き、何かを握る動作をした。

刹那、俺の本能が俺自身に呼びかけた。

今すぐその場を離れろ、と。

それは所謂”勘”という奴だったが、その”勘”とやらも戦場では

馬鹿に出来ないことを知っていた俺はすぐさまサイドステップを踏む。

勘が働いてからその場を離れるまで、コンマ1秒にも満たなかった。つか、それだけ時間かかっていたら俺は、

地面から生えた黒く禍々しい腕に鷲掴みにされていたであろうからだ。
ゲヘナ・ヒガンテ

「Fuu、危なかったぜ」

ひとまず溜め息を吐く俺。

だが、奴は一服つく自由さえも奪うようである。

ソフトボールくらいの大きさの魔力弾を約30個ほど生成すると、全てを俺に狙いを定めて撃ってきた。

「チッ！」

俺は舌打ちをしながらも、回避の体勢に入る。

が、すぐにその体勢を解除。

曲刀『双騎当千』をそれぞれの手に取り、迎撃の体勢へ。

様子見その2はここまでだ。

「ハッハア！」

俺は一気に飛び出してきた禍々しい魔力弾に対して斬り刻むように双騎当千を振り回す。

それは一瞬。

だが俺はその瞬間に舞った。

迅速に、きめ細やかに舞った
その舞いにより一瞬にして襲いかかってきた魔力弾は全て破壊された。

「な!？」

驚嘆するバミューダ。

それはそうだろう。

自身の本気の力を1度ならず2度までも伸のしたのだ。

そんなバミューダに対して、俺は平然としていた。

……さっきの魔力弾を全て破壊した時に、俺の勝利への自信はさらに強まった。

さて、次は何が来るのやら。

そう思いながら俺は大きく伸びをし、
そこで気付いた。

「……もうそろそろ日も落ちるな」

最初から夕方だったが、どうやらいつの間にかそろそろ日没するという時間まで戦っていたらしい。

「……こりゃ彼奴アイツらら心配するな」

1人呟く。

もちろん彼奴らというのはビキノスの連中のことだ。

「……なあ」

俺は宙に浮いているバミューダに問いかけた。

「そろそろ終わりにしねえか？」

返答は受け付けない。

奴の元へエア・フロアを駆使して突っ込む。

「速……」

奴が何か言ったが、この際シカトだ。
奴が剣を前に出して防御体勢に入る。
それに対して俺は横一文字の攻撃を、

繰り出さなかった。

繰り出すフリをして、少し飛び、奴のから空きの頭上へ。

そして一瞬の内に双騎当千をしまい、大鎚『孤無双』を手に取り、

「fall down（落ちやがれ）！！」

思い切り相手の脳天にブチかましてやった。

「グウッ！」

予想外であつたであろう頭上からの攻撃を防ぐことのできなかった
バミューダは地面へと落下していく。

「もう一発！」

そんな奴に俺は剣に魔力を溜め、斬撃の衝撃波を2つ放つ。

空中からの迫撃をくらったバミューダはさらに落下の速度を上げてしまい、受け身を取ることが出来ず、

「ガアッ！！」

地面に激突。

だが、俺のラッシュは止まらない。

エア・フロアを駆使し、俺自身も地面に突っ込む。

そして激突したばかりで隙だらけの奴に、

「ゼアアアアア！！！」

俺自身が黄色い魔力を纏い、ほぼ音速で奴の懐に突っ込んだ。

「……………」

悲鳴は聞こえない。

それはそうだろう。

今のが俺が持っている最強の技だからだ。

俺が纏った魔力は、バミューダが纏った魔力の何倍も濃いものだ。

この魔力が無ければ、音速で突っ込む時に発生する衝撃波で俺もボロボロだっただろう。

この衝撃波はそこいらの衝撃波とは格が違う。

しかもこの魔力、自身を守るだけでなくこの衝突の攻撃力を上げてくれるという、まさにご都合主義な代物だ。

「……………」

気絶しながら徐々に蒸発していくバミューダ。
死に逆く

でもコイツ、また3ヶ月すりゃ復活するんだよね……

「……面倒な奴だなアンタは」

呟くように言い放つ。

相手が聞いてようが聞いてまいがそんなの関係無い。

「……行くか」

そう呟き、俺はそこを去ろうとし、
そこで気付いた。

「……あちゃ〜」

さっきの音速の突進で舞った土煙が晴れたところだった。

「……やり過ぎたか？」

街は、ボロボロだった。
主に地面が。

……さっきの俺の攻撃で、辺り一面に地面にヒビが入っていた。

「……手加減したんだけどな〜」

まあ、大方魔王の所為にしておこう。

そんなことを思いながら、俺はビキノスを去っていった。
空を見上げると、ポツポツと淡い光を放つ星が輝き始めていた。

Chapter 1: episode 9 (banana side)・魔王

○ ○次回予告 ○ ○

ゴウ「巫女服に貧乳……」

俺の趣味にジャストミート！」

乞うご期待！！

亀更新ですみませんでした。

そしてコラボレーション中断してすみませんでした！

m (— —) m

不幸なことに、強盗団に出くわしました。

「オラア！ 早く金渡せ！」

「この娘がどうなってもいいのかア！」

「殺しちまうぞ？ 早くしねえと殺しちまうぞ!？」

……というより、人質に取られたというべきでしょうか。……言われなくても、そういうべきでしょう。

しかも強盗達はなんかベタな台詞を言っています。まあ、そんな連中に人質に取られる私も私ですが。

どうしてこんなことになったんでしょう。と、回想してみると……ものの数秒で終わってしまいました。それは私が人質に取られた理由が如何に単純であるかを表しているようで。

『銀行に入ったらたまたま強盗団がいて、ソイツらがたまたま入り口に固まった形でいて、そこに私が入って、そのままナイフを向けられて人質になった』

終わり。

これで回想終わり。

……これをさらにまとめてみました。

『たまたま近くにいたから人質になった』

終了。これ以上もこれ以下ありません。

「ハア……」

思わず溜め息が出てしまいました。それはそうでしょう。たまたま人質にされるなんて、悪運にも程があります。あゝあ、何で今日はこんなに不幸なんでしょう。

「さつさと金出しやがれ！」

朝乗った馬車は馬が脱走した所為で1時間遅れての発車でしたし、途中から雨降ったからちよつと濡れましたし、お陰で新しい勤め先には初日から遅刻になりますし……

「兄貴、見せしめにコイツの耳切ってやりましょうぜい！」
「お、そりゃいいな！」

そしてこの強盗。はあ、今日は厄日なのでしょう。

……オマケに強盗つて、壮大なトラウマがあるんですけど……

「おいテメエら、早く金出さないと……」

……と、怒声やらざわめきやらで溢れかえっているこの空間の中で1人呑気にそんなことを考えていると、

「……まずは耳を切らせて貰うぜ!!」

突然耳を引っ張られ、付け根にナイフを突きつけられました。

「な!？」

驚愕する銀行員ギャラリーと一般客。その反応を見て満足感を得る強盗達。下品な笑顔がさらに一層深くなる。

しかし、当の人質本人はといいますと、

「……ハア」

……今日で何度目だったでしょうか。また溜め息が出てしまいました。何なのでしょう、私何も悪いことしてないのに……
オマケにこの強盗達、かなりの小物と見えます。もうその辺のチンピラのほうが身体的にも精神的にも強いと思われる程です。

「……嫌な日」

……どうしようもない事を吐き出してしまいました。
直後、

私をホールドしていた男が吹っ飛びました。

「……は？」

またしても周りが驚愕の表情を浮かべていますが、先程とは違って困惑の色も混ざっているようです。ある者は眉毛を八の字にし、ある者は目を見開き、ある者は口を大きく開けたまま動かないでいます。

それはそうでしょう。なんせ男を吹っ飛ばしたのは、

「……私ね」

赤いショートヘアを揺らし、

「今日はどうしてもストレス溜まっているんですよ」

紅いワンピースを靡かせる、

「だから……」

林檎みたいなこの私、

「サンドバックになりなさい」

エレン・レッドストーンでしたから。

「な、ななな……」

……辺りを見回すと、私のことをジーツと凝視する強盗達の滑稽な顔が。ま、それはそうですね。ゴツい仲間がその辺の女の子に吹き飛ばされたのですから、無理もない話です。

でも、分からなかったのでしょうか。私が発しているオーラとかで判断……

「何だこの化け物はアアアア!!?」

……五月蠅い。

今のはホントに五月蠅かった。口を開けたままでいた強盗団の1人がいきなり大声を出しやがったのです。それでも顔は滑稽なままでしたけど。

それにしても、改めて思います。この強盗達、小物ですね。強さ

としても、男としても。普通、女の人に対して”化け物”なんて言う男の人なんていないでしょうに。

と、心の中ではそう思ったりしますが、それは現実では有り得ないこと。確かに日常生活の中で女の人に”化け物”なんて言う男の人がいたら、その男はまさしくクズ確定でしょう。しかしその女の人が絡んできたチンピラ達を目の前で秒殺したら、どんな男も紳士の風格を捨て去り、その女を化け物扱いするのではないでしょう。男の目の前にいるのは麗しい淑女^{レディ}ではなく、人間の皮を被った何か^{モンスター}なのですから。

……つと、閑話休題。今は無駄話に1人で花を咲かせる時間ではなかったのだね。

「……さて」

今一度強盗達を見てみると、まだ統制は取れていないようです。やっぱり小物です。もし私が強盗団のリーダーでしたら統制を取ったり、新たな人質を取ったりなど、何らかのアクションを起こしていますね。その方が何もしないよりはマシだと思えますから。

しかし無能な強盗達は相変わらずパニックに陥ったまま。そんな彼らに私は、

「……もういいでしょうか？」

と、問う。但し返答は待ちません。返答を耳に入れる前に

「フッ！」

私の蹴りがヒットし、また1人撃破。全く、雑魚すぎます。流石小物。もちろん小物如きにこの流れは止められません。今吹き飛ばした男の懐^{ふところ}からナイフが飛び出したのを見逃さなかった私は宙に舞

うそれを素早くキャッチ。そして別の男の肩目掛けて打ち放つ。

「グガッ！」

見事に突き刺さりました。うん、ダーツだったらド真ん中でしたね。

私はそのまま流れでまた別の男の手を取る、というより掴むと、

「ハアアアア……」

腰と右腕の動きを利用してその男を振り回し、

「セヤアアア！！！」

そのまま、肩にナイフの刺さった男目掛けて投擲^{とつてき}。肩ナイフ男は投げられた男と共に撃沈してしまいました。

「か、囲め！」

やっと相手のリーダーが指示を出したようです。その命令に合わせて部下達も私を囲みます。さっきよりも大分良い動きで。

……なるほど、と、1人感心してしまいました。この強盗団、指示待ち人間が多いようです。

因みに私かというと、ご丁寧に強盗達に囲まれてやりましたよ。

あ、もちろん故意に、ですよ。ハンデですよ。何か問題でも？

と、そうこうしている内に、相手も私を囲み終わったよう……

「おっと」

私は後ろから迫る気配に気付き、後ろに鋏の形を象った左手を配

置き、その鋏を素早く閉じました。するとどうでしょう。そこにはメタリックな刃が美しい、それでもって無骨なナイフがあるではないですか。そしてナイフの柄には、岩の形を象ったガツシリした男の拳が。

「んな!？」

「あら」

漸く私が振り返ると、そのナイフの持ち主はおそらく強盗達の中でも一番のパワーを持っている事が推測できました。理由は単純。筋肉の量が他の男と比べて圧倒的に多いから。

しかし、女の私が言うのもなんですが、私の前に出ればそこらの女子供と対して変わりはありません。

「えいつ」

ナイフを挟んでいる左手を捻る。それだけで男のナイフは折れてしまいました。

その直後に男の腕を掴むと、

「邪魔」

背後から襲ってきた別の男達を巻き込む形で振り回し、振り回し、振り回す。最後に、掴んでいた男を天井目掛けて打ち上げる。

と、間髪入れずにまた新しい連中が襲いかかってきました。全く、小物の癖に元気な連中です。まるで外で元気良く遊ぶ子供を見ているかのようです。

……というか、私まだ自分の武器も出していないのに何ですか、この体たらくは。弱すぎでしょう。

と、思考しながら襲いかかってきた男達を一掃。もう描写してや

る価値もありません。

「……あら、残りは貴方だけのようですね」

気付けば、生き残りは強盗団のリーダーただ1人。残りのメンバーは知らずして私が全滅させてしまったらしいです。

「な!?!」

「腹、括って下さいね」

例の小物は私に恐怖したのか、足をガクガクと震わせています。そしてその目には、絶望の色が。

……そうです。あなたの目が語っているように、

「もう、あなたは終わりなんですよ」

と、笑顔で宣告してみました。
すると、

「う」

彼はナイフを抜き、私にナイフの先端を向け、

「あああああ

!?!」

声にならない叫びをあげながら、突進してきました。

「……はあ」

私の口から、また溜め息が。正直言って、そんな攻撃なら放たな

い方がマシです。隙だらけで避けやすいことこの上ない。しかし私は、

真っ正面から受けてしまいました。

「……………」

辺りに電撃が走る。ギャラリーにも、強盗団のリーダーにも。

強盗団のリーダーの顔からは困惑の色が窺えます。今まで無双していた私がこうもあっさり攻撃を受けるとは思っていなかったようです。しかし暫くして困惑から解放されたのか、

「……クツクツクツ」

彼は笑い出しました。次第にその笑い声は徐々に大きくなり、

「ヒヤハハハハハハ!!」

最終的に大笑いとなり、辺りに響き渡りました。そうです、どんな結果になろうが、彼は”勝った”のです。私から部下を何人も奪われてしまいました。が、気絶してるだけです。最終的に彼は私に”勝った”のです。後はこの銀行を乗っ取り、金を奪って去

るのみ。

そして敗者である私は死んでしまうのです。二度と起きあがらず、生命活動を終了させる。体を冷たくしながら、永遠の眠りにつく……

……という、

「こんな展開になるとでも？」

「「な!!?」「」

またしても辺りに電撃が走りました。強盗団のリーダーも、ギャラリーも、一斉に私の方に体を向ける。凶刃に倒れた筈の女に、体を向ける。

そして心臓部にナイフを突き刺されたまま倒れていた私はどうと、

「よっこらせ」

と、年寄りみたいなことを言いながら、難なく立ち上がりました。もちろんこの光景にたいして驚かないような強靱なハートの持ち主はいなかったようで、辺りはざわつくのも当然です。因みに強盗団のリーダーはというと、

「な、ななな……」

胸にナイフを突き立てられたまま屈託のない笑顔でいる私に恐怖しているようです。もうさつきとは比べ物にならない程怯えていらつしゃいます。そんな彼に私は、

「……ウフフフ」

不気味な笑い声を漏らしながら、頭を垂らし、

ゆらり

ゆらり

と、ゆっくりとした足取りで近付いていきます。

「ヒッ……」

一歩、また一歩と距離を詰める。

「く、来るなあ！」

彼は何か鳴いているようですが、五月蠅い鳴き声は耳に入れません。徐々に彼を壁に追い詰めます。

彼の背中が壁にぶつかりました。もう逃げる術はありません。それでも私は近付きます。コツ、コツ、と、足音を鳴らしながら。ゆらり、ゆらり、と近付きながら。時折自分の顔に自分の血をべとりつけながら。

ついに、私は彼の目の前まで来ました。距離的にいえば、恋人同

士がキスをする前の時と同じ位の距離です。しかしここでキスをするなどという甘い展開にはなりません。私は垂らしていた頭を上げました。

べつとりと、毒々しい紅をつけた、しかしにんまりと笑う私の顔。手についた紅を彼の頬に付けます。ねっとり、彼の顔にも私の紅が。

そして私は、囁きました。

「地獄で、足搔け」

〇〇〇〇

どうやら、あのギャラリーの中にもギルドの方がいたようです。で、もちろん私の名演技 ナイフを刺される所から強盗団のリーダーを恐怖で気絶させる所まで を見ていたようで。後日、その人から注意を受けました。

「自重して下さい、『アップル暴風』さん」

……私の二つ名は、相変わらずダサイままでした。
……私の二つ名は、相変わらずダサイままでした。

やっとこさヒロイン登場。

ちなみに今回の話の「鳴いている」は誤字にあらず。ややくしくてすみません。

感想、アドバイスなど、お待ちしております。

俺、決めたよ……

今度からタグに『亀更新』追加しておくよ……！

私の名前はエレン。エレン・レッドストーンです。好きな色は赤。身長158cmで、体重は……女の子にそんなこと訊くのですか？と、軽い自己アピールをする分ならどこにでもいる普通の女性と変わりはないのですが……

「90……あと10体ですか」

……いざ戦闘となるとあら不思議。そこらへんの歴戦の戦士ですらも霞んで見える程の化け物に変貌してしまうのです。その強さから周りからは

『アップル暴風』

と、呼ばれています。

ええ、自分でも思いますよ。ああ、なんてダサイ二つ名なんだろう、って。でも仕方ないじゃないですか。この呼び名を付けたのは私ではなく周りの人なんですから。

と、まあ、私の自己紹介はこれくらいにして、現在の状況を説明しましょうか。

「……一気に終わらせます」

デビルピッグというモンスターに囲まれています。

デビルピッグというのはその辺の雑魚モンスターの一角なのですが、一応ランクはC。一体一体の強さはランクDくらいなのですが、

このモンスター、無駄に連携が優れており、そのことがあってリンクモンスターに位置付けられているのです。まあ、私はその連携ごと潰してしまえますがね。ほら、もう残り10体。

「ブ、ブヴヴヴヴヴ！」

……おや、敵の一体が鳴きましたよ。また何かしらの連携が来るでしょうね。

「ブヴヴヴヴヴ！」

おや、全員突っ込んで来ましたね。でもよく見ると、一体一体のスピードが違う。そしてブタ達は一齐に私めがけて体当たりを仕掛けて来たのです。巧妙にも、一体一体軌道までも違います。あるものは頭を、あるものは足を、あるものは鳩尾を。

狙われてる私が言うのも何ですが、一体一体の軌道を変えるのは良い策だと思います。ですが、スピードを変えたのは間違いでしたね。スピードを変えらるということは、則ち”順番”が発生することを意味します。つまり私は、一襲ってくる順番を把握することが出来る《……………》のです。順番を把握したら後は簡単。

「フツ、ハツ、ヤツ、セイッ……………！」

順番通りに防御するだけです。僅かに生じているタイムラグを見切り、頭、脚、腹、と、デビルピッグが襲いかかるのを左手の盾で防ぐ。すると驚く程にブタさん達が弾かれていきます。

そして盾で防ぎきった私は、

「ハツ、セイ！」

右手の棍棒^{メイ}で相手を葬る。今ので前方の4体^スがご臨終なされたようです。そして私は残党を出すヘマなど当然するはずもない訳です。

「セヤ！」

鈍い音が辺りに響き、100体目のデビルピッグが息を引き取りました。

〇〇〇〇

ギルド、スターナ支部。私が今現在勤めている場所です。実は今回のデビルピッグ100体討伐もギルドの依頼でして、今ギルドリーダーに報告を行っています。と、そこに、

「ごめんください。ギルドはこちらで合ってますの？」

見るからにどこかの貴族のお嬢様のような、それでいてツインとした雰囲気^スを纏った女性が訪問してきました。もちろんギルドのメンバーではありません。その令嬢を、ギルドメンバーの1人は依頼力^スウンターにお通しします。令嬢は淡々と依頼内容を説明し、そのギルドメンバーは説明を簡略化して用紙に書いていきます。

そんな2人を尻目に私は報告を終えました。そしてその場で報酬を貰います。ところが……

「300マニラって……やけに少ない報酬ですね。依頼のランクに見合っていないようですが」

マニラと言うのは、こちらの通貨の名前です。しかし今私が毒付いた通り、何故か今受け取った報酬が従来の報酬と比べて明らかに少ないのです。私の皮肉に対しギルドリーダーは顔を渋らせた後に申し訳なさそうな声音で返してきました。

「悪いな。ここのギルドはちと不景気でな」

「ちよつとのレベルでは済まない程じゃないですか？」

「……すまん」

ギルドリーダーはそこで一旦言葉を区切り、私に”耳貸せ”と合図を送りました。

「……実はこの街自体、貧富の差が凄くてな。この街にはあそこにいるお嬢さんみたいな金持ちが、オイラ達みたいな貧乏人しかないいな訳よ」

「何故、そこまでに差があるのですか？」

「……明日の夕食時になったら分かる」

そこで私達は距離を取り直します。話が中途半端になりましたが、ギルドリーダーも暇ではありません。

「ありがとございました、ギルドリーダー」

これにて、依頼完了です。礼を言い、夕食を取ろうと報告用カウ

ンターから離れようとした時、

「……なんで名前で呼んでくれないんだ？」

と、ギルドリーダーの寂しそうな声が。……申し訳ありませんが、私……

「……名前、何でしたっけ？」

ギルドリーダーの名前、忘れちゃいました。

「……ジョナサンだ」

〇〇〇〇

夜が明けて、朝が来ました。おはようございます。エレン・レッドストーンです。今日もギルドの仕事を頑張ってこなしたいと思います。

という気持ちで掲示板の依頼を見てみると……

「……孤児院の修理作業及び清掃？」

1つの依頼に目が止まりました。こういう依頼は珍しくなく、むしろモンスターの退治よりも生活に係わる依頼の方が多いのです。

落とし物捜しだとか、博物館の警備だとか、荷物の宅配だとか。しかし私が注目したのはそこではなく。

「ジョナサン」

「何だ」

「この依頼、私が受けさせて貰います」

と言い、例の依頼の紙を差し出しました。しかし、

「……エレン」

「何でしょう」

「これ、参加人数6人以上じゃないと駄目なんだが
あれ？」

嘘じゃないぞ、と言わんばかりにジョナサンは”依頼条件”の項目に指をさす。そこには確かに『6人以上必須』と、バッチリ書かれていた。

「意外におつちよちよいなんだな、アップル暴風」

「か、からかわないで下さい！」

僅かに恥ずかしさを感じて、顔を赤くする私。……これじゃあ、さらに林檎じゃないですか。

と、そこに、

「ふむ、先を越されてしまったかのう……」

そう呟きながらこちらに歩み寄ってきたのは、このギルドで最高齢のベテランギルドメンバー、マック。見た目は如何にも紳士なのですが、今まで左手の杖1本で敵を駆逐してきた、凄腕おじいちゃ

んらしいです。

「ジョナサンや」

「どうしました、マックさん？」

普段はギルドメンバーの誰に対してもタメ口のジョナサンも、この人に対してだけは口調が丁寧になります。

「『孤児院の修理作業及び清掃』という依頼があつた筈じゃが……先を越されてしまったかのう？」

何という偶然でしょう。

「1人確保。残り4人ですね」

「何じゃ？」

「実は……」

私が発した言葉に疑問を持つマックさんにジョナサンは間髪入れず、そして懇切丁寧に説明しました。すると……

「……キール、セーラ」

「どうした、父さん」

「おじいちゃん、どうしたの？」

マックさんの息子のキール、その娘のセーラが呼ばれてこちらに来ました。私は問答無用で2人を追加します。

「ジョナサン、残り2人、ですね」

「何が？」

「実は……」

疑問符を浮かべる2人にこれまたジョナサンはイチから説明しました。するとまた……

「うーん、なら……メル！」

「あ、何い？」

「こっち来て！」

言われて来たのは、ブラウンの髪をツーサイドアップにしている、勝ち気な少女、メル。当然彼女も、

「1人追加。何という芋づる式でしょう」

「あ、何よう？」

「実は……」

ジョナサン説明中……

「いいわよ」

あっさり承諾したメル。というか全員即座に了承してくれましたね。皆さんいい人です。

しかしそう旨くいく筈もなく、その後、なんとギルドメンバー全員に断られました。

「はあ……」

思わず溜め息が出ます。ここで終わりか。そう思った時でした。

「ギルド、スターナ支部はここか？」

現れたのは、1人の男……

「!?!」

私は男の容姿に驚愕しました。

男は緑の髪を持ち、顔は美青年という言葉が似合うくらいに美しく。雪のような真っ白な肌をしています。慎重は170cmくらいと少し低め。手や足は淡いベージュのローブを着ている所為で全く見えません。それどころか、紺のマフラーを着用していて口の周りも覆われて見えなくなっています。

と、ここまではまだ普通の範疇に入るのですが……問題は男の髪型。

私は今まで長髪の男性を沢山見てきました。そう珍しくもないからです。また、その髪を纏めている男性も珍しくありません。現に、キールも腰まである髪をポニーテールにしています。ですが……

ツインテールの男性は流石に初めて見ました。

「ギルド移籍の手続きをしたいのだが」

目を見開いている私の横を通り過ぎてその深緑のツインテールの男はギルドリーダーであるジョナサンに歩み寄ります。しかしジョナサンも私に負けなくらいに目を大きく開けています。やはりツインテールには誰もが驚くのでしょうか。しかも、似合っているという奇跡。

ところがジョナサンは、私とは違ったところで驚いていたようだ。

「ア、アンタ、そのツインテール、まさか……」

ジョナサンの声に彼は沈黙しました。その顔は、驚くのは後にしろ。取りあえずさっさと手続きを終わらせたい。と言わんばかりの物でした。ですがジョナサンの驚嘆の心は膨張していくばかり。そしてそれは意外にも早く破裂しました。

「……『法術王』がきたぞおおおお!!」

「……は?」

『法術王』。

『魔法』 あるいは『魔術』とも呼ばれる であるなら何でも使いこなし、さらに上級魔術の詠唱破棄にまで成功したという者。それだけに留まらず、オリジナルの魔法も幾つか作ってしまったのか。

私も『法術王』の噂はちらほらと聞いたことがあります。ですが……ツインテールのことは知りませんでした。

「ほ、『法術王』!?!」
「ホントに!?!」

「マジかよ……！」

「何ということじゃ……！」

……どうやらジョナサンの所為で周りに『「法術王」が来た』という事実が広まってしまったようです。

「……………」

相変わらず困った顔をした『法術王』が、私に顔を向けてきました。このギルドの中で唯一『法術王』の名を聞いてもさして驚いていない私に。……まあ、私の場合、『ツインテールの男』という新鮮極まりない属性を目の当たりにして呆然としていただけなんですけどね。その所為で『法術王』のインパクトが薄れていたのが原因なんですけどね。

「……………お前は驚かないのか？」

『法術王』から話しかけて来たので

「……………あら、驚いて欲しかったのですか？」

「……………いや」

思考回路を取り戻し、適当に返答してみました。私の皮肉に対する彼の返答は「No」。しかし彼は続けます。

「……………出来れば、この喧騒をどうにかしてほしいのだが」と。

そんなこと、『アップル暴風』の私でも無理です。

「いいですよ」

それでも、彼の願いを引き受ける私には、立派な策があります。

「……恩に切る」

「ただし」

しかし、困っているのは彼だけではありません。私だって、別件で困っているのです。

「このクエストに参加してくれたら、の話ですけど」

そう言っ て私は例のクエストの紙を彼の目の前に押し付けます。その紙を一瞥した彼は、

「良いだろう」

と、あっさり引き受けてくれました。

交渉成立。という訳で、私は『策』を発動します。

「ジョナサン」

その策とは……

「周りの人達を黙らせて下さい。『法術王』がお困りですよ」

ズバリ、他力本願。こういうことは、そのグループの長に頼むのが1番なんですよ。

「……お前」

「約束は約束です」

『法術王』が卑怯者を見るかのような目を向けてきましたが、そんなの気にしません。気にしたら負けです。

何はともあれ、これで彼の悩みも、私の悩みも消えたので、結果オーライというヤツです。

「……フン」

ジョナサンの一喝で周りが静まった頃、彼は私から視線を外し、ジョナサンへと向けました。そしてあっという間に手続きを終わらせると、再び私の方を見て、

「手続きのついでに、お前の見せた依頼を受理してきた」

と、わざわざ報告して来ました。

「ありがとうございます」

やっと私は、いや、私達は孤児院に向かうことが出来そうです。と、思いましたが、同時に、

「（あれ、この人って『法術王』とか何とか言われてましたが……、今回のクエストでは特段役に立つ訳ではないのでは？）」「

とも、思ってみたり。

なんという微妙な終わらせ方。

次回は孤児院でほのぼの……になるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975j/>

Burn A Na・Blast ～バナナ・ブラスト～

2011年10月6日17時09分発行